

平城宮第 133 次発掘調査現地説明会資料

—平城宮南面西門（若犬養門）地域の調査—

奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部
昭和56年11月28日
千田剛道

平城宮跡発掘調査部では昭和56年10月1日から平城宮南面西門（若犬養門）地域、約3,000㎡について発掘調査を実施しており、現在継続中である。

平城宮の南面については既に、中央門（朱雀門—1964）、東門（壬生門—1980）の地域で調査しており、西面では中央門（佐伯門—1966）、南門（玉手門—1964）の発掘をおこない、さらに的門（1966）とこのたびの調査を加えて、平城宮の四至の様相がますます明確になってきた。

遺構の概要

発掘区周辺の造営前の地形は東から西に緩く傾斜する低地で、宮造営に際しては盛土して整地をおこなっている部分がみられる。

今回の主な検出遺構には、門、築地、二条大路、池状遺構などがある。

SB01（南面西門—若犬養門）礎石、根石はもちろん基壇も後世の削平によって失われていたが、幸いにも柱位置に地固めのための円形の基礎地業がわずかに残る個所があり、桁行が約5.1m(17尺)等間の5間、梁間が約4.5m(15尺)ずつ、2間の平面規模であることが判明した。朱雀門以外の宮城門で柱位置が判り、規模が具体的に知られたのはこれが初めてである。なおSB01の基礎地業に切られた素掘りのL字形溝（SD08）が重複している。

SA02（南面築地大垣）SB01の西方に約30m分を検出した。築地北半部のみが残り、築地本体の大部分は失われているが、内側の犬走りが良く残っている。犬走りには築地を版築する際の堰板を支える添え柱穴とみられるものが点々とある。

SF03（二条大路）SB01の前面を東西に走る道路で、北側溝（SD04）・南側溝（SD05）心心間で約36mある。SB01心からSD04心までは約12mである。両側溝とも素掘りのままであり、SD04には門前に掘立柱の橋（SX13）がかかっている。

SD06（南北大溝）SB01の西方にある溝で、北はSG07にとりつき、南端はSD03につながる。溝中にシガラミを6列設けている。何回かの改修がある。

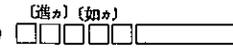
SG07（池状遺構）SB01の西北方に池状遺構の一部を検出した。深さ1.5mほどでなお西北へ広がる。南岸よりに掘立柱6本からなる遺構SX12がある。

SD09（東西溝）SB01の北側柱列の北9mにある素掘り溝。のちに斜め溝（SD10）で破壊されている。

出土遺物

多量の瓦のほか土器、銭貨、金属製品、木簡、木器類が出土した。瓦は大半を藤原宮式が占め、奈良時代後半のものも少数ある。土器には「常」「盛二」「大」「厨」などと墨書したものがある。銭貨としては「和同開珎」「万年通宝」「神功開宝」がある。金属製品には帯金具、鉄釘がある。木器は、人形（ひとがた）、刀子柄、曲物、独楽、桧扇など種類に富む。これらの多くはSD04から出土した。主な木簡の釈文を以下に掲げよう。

SD06（南北大溝）出土木簡

- (1) (表) 内膳司牒 小子部門司 塩一古 海藻一古
 豎魚三古 息口三古
 (裏) 
 状故牒 正六位下行典膳雀

(3) (表) (人面を描く)
 (裏) 神護景雲

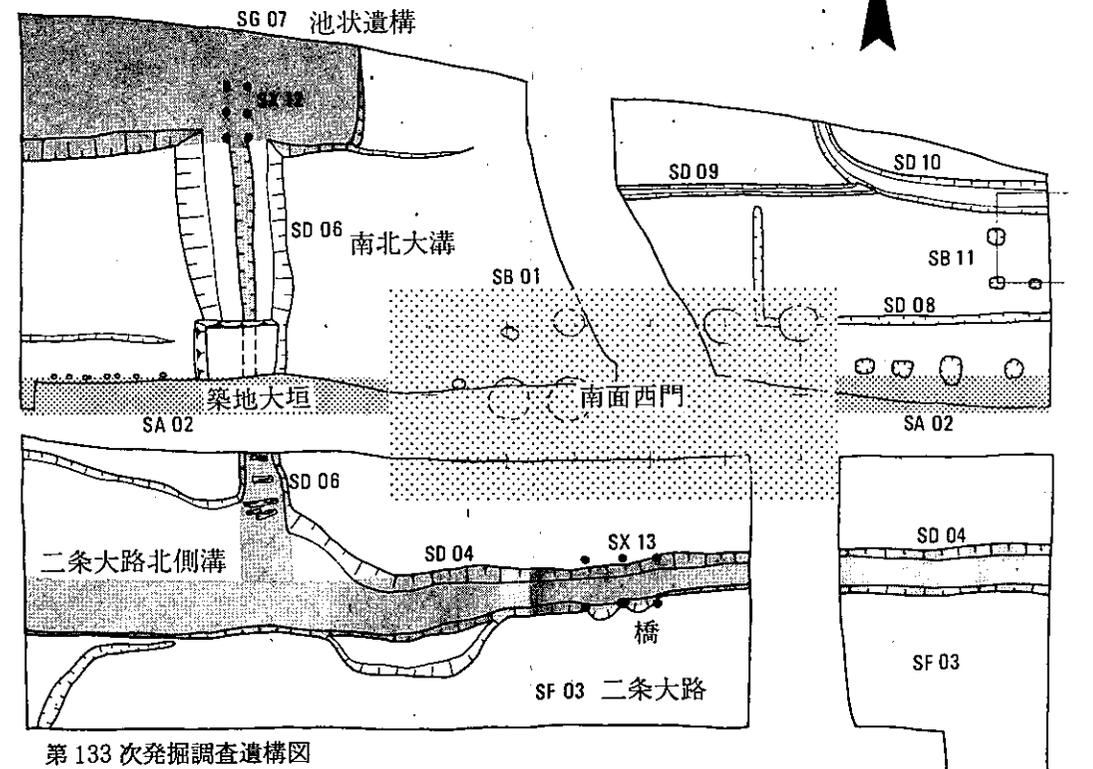
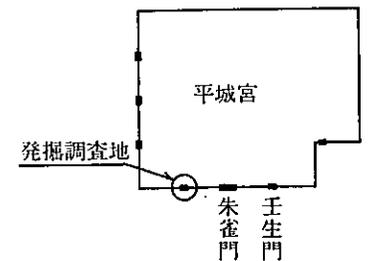
(4) (表) 田原銭五千文
 (裏) 計紀朝臣人主

(5) 位祿布十四段以出

SD04（二条大路北側溝）出土木簡

- (2) (表) 内藏佐官之馬一匹
 (裏) 宇治宿禰道

(6) 付権掾高向公万呂



第 133 次発掘調査遺構図